

## 第10組 興久寺住職 西松 義尊

8月9日、長崎に原爆が落とされた日、久しぶりに記念式典をテレビを通して見ました。その前の日、やはりテレビを通して一枚の衝撃的な写真が映し出されました。

小学校の高学年の子供が直立不動で立っていました。その背中に小さい子供が帯で背負われ、その首は後ろにたれています。直立不動で立っていた少年の弟で既に死んでいたのです。原子爆弾で死んだと思われる弟なのです。焼け野原となった荒野の中にたたずむ姿に涙があふれてきました。

その写真を撮ったのが、アメリカの軍の報道カメラマンだったのです、自国の落とした原爆でこんなに悲惨な姿になった長崎から、何故、アメリカは原爆を落としたのかを問うているのです。アメリカの退役軍人は、このことは正当な行為であったと。

私の頭の中に連鎖的に浮かんだのは、大岡昇平氏の小説「野火」でした。戦地での話ですから、異常な人間の心理状態の中での話とはいえ、ショッキングな話です。人間が人間の肉を食べようとするシーンです。人間とは一体何なのか問われてきます。

司馬遼太郎氏はテレビの対談の中で「人間は正義という名の下では、どんなことでもやってしまう」という言葉が心に残っています。

宗祖は善導大師の観経疏(散善義)の文から悲難述懐和讃をおつくりになっています。わが世とわが身に対する親鸞聖人の鋭い眼で和讃されています。

現代は宗祖の生涯に学ぶことの大切さが改めて思われることであります。